新型インフルエンザ

本県初の感染を確認

日南市の会社員女性

都城の2人は陰性

県新型インフルエンザ総合対策本部（本部長・東国原知事）は18日未明、日南市の会社員女性（43）が新型インフルエンザに感染していることを確認したと発表した。女性は同市内の感染症指定医療機関に入院しているが、快方に向かっているという。新型インフルエンザの感染確認は県内で初めて。

同本部によると、女性は両親と3人で暮らしており、今月14～15日にかけて両親と親せきの4人で大阪市に滞在していた。15日午後7時30分大阪伊丹空港発の航空機（ANA509便）で宮崎空港に到着し、自家用車で日南市の自宅に帰宅したという。

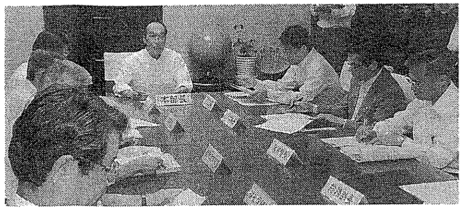
16日から日南市内の会社に出勤したが、夜に全身がだるいなどの症状を感じたため、17日午後に一般医療機関を受診。37・6度の熱とのどの痛みなどがあったことから、簡易診断キットで検査した結果、A型陽性を確認。さらに県衛生環境研究所で行った遺伝子検査で、新型インフルエンザと確定した。

入院中の女性は18日午前9時現在、目立った症状もなく、発熱も36・1度に下がるなど快方に向かっているという。同本部は、女性の職場の同僚や受診した医療機関職員、家族など25人を接触者として把握。最終接触から1週間の健康観察を行うとともに、新たな行動先や接触者の特定を進めていく。

このほか、本県では17日、オーストラリアから帰国した都城市内で同居する20歳代女性と30歳代男性が、38度未満の発熱やのどの痛みなどで医療機関を受診。新型インフルエンザ感染が疑われたため、衛生環境研究所で遺伝子検査をしたが、二人とも陰性だった。

県内初の新型インフルエンザの感染発生を受けて、東国原知事は「いつどこで発生してもおかしくない状況と考え備えていたため、別に驚くことではない。県民の皆さんには手洗いやうがいの励行、マスクの着用など通常の予防対策を行い、冷静な対応をお願いしたい」と話していた。

県内初の新型インフルエンザ感染確認を受け、東国原知事出席で行われた県の記者会見（18日午前0時24分ごろ、県政記者室）



県内初の感染確認を受け、県の対応を決めた県新型インフルエンザ総合対策本部（18日午前9時すぎ、県庁）

発熱外来 県内全域に開設へ

県総合対策本部 相談電話回線増やす

県内初の新型インフルエンザ感染確認を受け、県新型インフルエンザ総合対策本部は18日、県庁で第4回会議を開き、感染が疑われる患者が受診する発熱外来の県内全域の開設など、県民生活の維持と感染拡大を防止する対応を決めた。

発熱外来は、県内発生を想定して決めた県内28医療機関に設置する予定で、準備が整った医療機関から開設する。感染者と接触の可能性があり、発熱などの症状がある場合は、発熱相談センターに相談して指示された医療機関で受診するよう要請する。

学校や保育施設などについては、今回の感染者の濃厚接触者の中に学校・保育施設の職員、生徒がいないため、現時点で臨時休業の要請は行わないが、二次感染が生じるなど感染拡大の恐れが高まった場合は対策本部で審議し、臨時休業を要請することとした。

また、イベントなどの集会や感染発生地域での外出、事業者が行う事業などの自粛は行わないが、主催者や事業者に感染拡大を防止する工夫を検討するよう要請。県民には、人込みをなるべく避け、込み合った場所でのせきエチケットの徹底や手洗い、うがいの励行を改めて求めた。

県内初感染に伴う相談急増に対応するため、県は発熱相談センターの電話回線を現行の2から5回線に増やした上、対応職員も増員した。感染者と同じ航空機の搭乗者が特定されていないため、

0120・793・089
県発熱相談センター
午前8時30分～午後8時

東西な

ど根性トマト、実る

「こんなに実がなるとは…」と驚いているのは延岡市水尻町の門司嘉一郎さん（72）昌子さん（72）夫妻。コンクリート張りの軒下で育った〝ど根性トマト〟の株＝写真＝に16個もトマトが実った。

トマトが根を張ったのは、門司さんの自宅隣の空き家の軒下。コンクリートのすき間から窮屈そうに芽を出し、初めは地面をはうように伸びていたという。

意外にも実を付け始めたため、「このままではかわいそう」と棒を添えて立ち上がらせたところ鈴なりに実を付けた。

もともとトマトは雨を嫌うが、軒下という場所が良かったのか、「畑のトマトより出来がいい」と嘉一郎さん。味が気になるところだが、「食べずに観賞用と

県内の湧水（ゆうすい）池から採取の微生物「シュウドモナス菌」の新種（MS－1株）に、ミツバチの伝染病予防や数の増加に効果があることが、前田昌調（まさちか）宮崎大農学部教授の研究で分かった。特許を出願し、同菌混合飼料「スーパーBee」として22日から発売する。ミツバチは果樹の受粉用が全国的に不足し、椎葉村などではちみつ生産用も減っており、健康で元気のいいミツバチ育成が期待される研究成果は朗報だ。

宮崎大農学部 前田昌調教授

ミツバチ救う微生物発見

県内の湧水から採取 病気を予防、数も増加

22日から飼料として発売

ミツバチの病気予防効果などある微生物の研究成果を発表する前田昌調・宮崎大農学部教授（17日、県政記者室）

22日から発売の養蜂用混合飼料「スーパーBee」

県庁で17日に記者会見した前田教授によると、ミツバチの代表的な病気に腐蛆（ふそ）病やチョーク病があるが、有効な薬が少ないのが現状。4年前、日本養蜂（ようほう）はちみつ協会の「病気予防に効果がある飼料をつくってほしい」の依頼を受け、研究に乗り出した。

前田教授は、土壌や淡水などに分布する自然細菌群集の中で一般的な善玉菌のシュウドモナス菌に着目。小林市内のミツバチがよく訪れる湧水池（水飲み場）から同菌を分離、培養し、MS－1株という新種細菌が優れた機能性を持つことを突き止めた。

専門の研究所に委託し、各300匹入りの3網室を使い新種菌の病気予防効果を試みた。砂糖液のみ投与、新種菌希釈液噴射、砂糖液の混合液噴射の過程で腐蛆病菌で攻撃。砂糖液のみは5週間で16症例が検出されたが、ほかは症例が出なかった。チョーク病の発生状況も2カ月間観察したが、新種菌希釈液無投与の380症例に対し、同液噴射巣箱は52症例と抑制効果は明らかだった。

成長促進効果も調べた。約2カ月間、1日おきに砂糖液との混合液を投与し、砂糖液のみと比較した結果、混合液投与に数の増加傾向を確認。ひな鳥や豚など使った安全性試験でも、新種菌配合飼料の体重増加が顕著だった。

農水省は先ごろ、イチゴなどの花粉交配に欠かせないミツバチが21都道府県で不足との緊急調査結果を発表。県によると、現段階では県内の需要と供給のバランスはほぼ取れているが、今後については予断を許さない状況という。

椎葉村は、はちみつを「椎葉の秘蜜（ひみつ）」と名付ける力の入れよう。養蜂家でつくるプロジェクトH（ハニー）推進協議会事務局の同村役場によると、平成18年に村内のミツバチが激減。その後少しずつ回復はしているものの、ピーク時には戻っていない。村活性化の一助となっており、一刻も早い数の回復を待ちわびている。

前田教授は「健康なハチの増大で、果樹やはちみつの安定収量につながれば」と話している。

1ケース（5袋入り、50巣箱用）6910円、1袋2290円。購入など問い合わせは、発売元の日本養蜂はちみつ協会（☎03・3297・5645）まで。

陳情は継

日向市の

日向市が所有する旧日向ハイツ施設でホテルを営む業者が、市と取り交わした施設の賃貸契約書などに関する経過の調査を市議会に陳情している。審査を付託された議会運営委員会は18日、閉会中の継続審査とした。

陳情書は「平成17年4月、賃貸契約に基づく付属施設の改修工事などについて市当局と事前協議したにもかかわらず、市の対応がなされていない」とし、確認議事録の調査などを求めている。

談話室

マダガスカルに給食制度を

延岡市の高

伸太郎さん

「学生時代に海外1

カ国を訪ねた経験から得たコミュニケーション能力を生かして、マダガスカルに貢献した

い」と意気込むのは、